

353
16

(12)

日 本 民 族
研 究 叢 書

木 村 鷹 太 郎 著

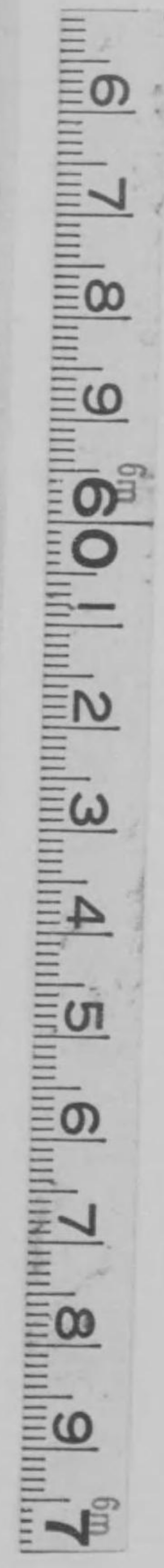
目 次

- 日本が世界に與へたる **世界平和の理想** 一
- 源氏の空蟬と、プラトーンの空蟬 二
- 潮來と、ベニスと、印度の室君 九
- 鏡花水月 二六
- 臺灣生蕃人物語 四二

日本が世界
に與へたる

世界平和の理想

— 外 三 篇 —



始



日本民族協會

研究綱要
會費員

●日本舊來の歴史は盡く、根本的に誤つて居る。民族祖先は大世界的に活動したものであるが、日本舊來の歴史家等は、史料の正解と歴史地理の知識が無かつた爲めに、之を現日本の小島國に押し込み削り込んで、凄絶的日本歴史を作つて居る。

●日本古典の新研究に據ると、日本民族の起原地は西亞、東歐の中間黒海四周の地、之を高天原とし、民族の活動は其れから、西は埃及、阿弗利加の西偏及び其内地深くにまでも及び、希臘、伊太利、佛蘭西等は同民族、又は親近種族であつた。

●其の東漸したものは、波斯、印度諸國から南洋諸島に及び、北は中央亞細亞から西伯利亞極東にまでも及んで居る。

●我等の民族は、海を渡つて、神話時代の太古既に大西洋から、又た印度方面、太平洋から亞米利加の探検、植民、及び命名を行つて居る。

●民族の古代史は、此通り、長年月の間に西に、東に遷り歴史の中心地は小亞細亞、波斯、希臘、モロッコ埃及

等と幾變遷し、其後印度に來て、此に長く留まり、最後——

寧ろ近古——に此極東の日本島國に落ち付いたので、

●日本古典も、史料も皆大世界的である。其れ故に眞正の日本古典及び歴史を知らうとする者は、此基礎的着眼を以つて世界的に研究せねばならぬ。吾等は此見解を以つて偽作的、而も縮小的舊來の日本歴史を、世界的大民族史に改造することを旨とする者である。

●單に歴史の眞理を得るに止まらず、此大民族史觀の基礎の上のみ、始めて眞正の國體——大乗國體の原理が立つことを確知する（從來の國體主義は小乘國體に過ぎぬ）。又た我等民族祖先の世界的雄圖の知識は、現在、將來の日本民族の眼界と抱負とを大ならしめることを信じ、我等の研究、發表の任務の愈々重大なことを感ぜずには居れぬ。

●會員——右に同感の士、之を研究せんとする人、又た本會に贊助を與へる人々は、我等の會員である。會則有用の人は御一報下さい。

●會費◎普通會員一箇月、一圓◎特別會員同、五圓◎特別贊助會員同、十圓。

日本が世界に與へたる 世界平和の理想

木村鷹太郎

「世界平和——日本より

全世界の文化歴史は高天原に起原したと同じく、世界平和の理想は日本の祖先から出たものである。然るに現時日本は軍國主義の國だなどと言はれて、何人も正々堂々と根本的に辯明し、説明し、以つて世界の誤解を解かうとするものが無いとは、實に不思議の事である。併しこれは日本人の眞正の日本民族史を知らぬに原因するのであるが、若し我等の新研究に據つて、眞の歴史を知つたなら、日本民族が世界平和の爲めに、如何に力を盡くしたかを知り、堂々之を天下に誇つて善いことを悟るであらう、特に「世界平和の理想」の如きは、實に日本民族に起原したものである。

日本が世界に與へた「世界平和」の理想は、世界の歴史の上には三つの系統の形を以つて現はれて居る。即ち其等は

第一 希臘神話のミューズの尊信

第二 猶太教の神政的世界平和主義

大正 10.10.24 内交

357-16

第三 政治的帝國主義である

ミューズの女神

希臘神話に九柱のミューズ女神があつて、神が人間を文化に導き、又た慰安を與へる爲めに立て給うた神々で、學問や、文藝や、美術や、農業や、雄辯等の靈として非常に尊い神々となつて居て、要するに人類の文化と平和との神々であることは天下の普く知る所である。

日本の宮中八神

祝詞の祈年祭に「大御巫の辭竟へ奉る皇神等の前に申さく」と云うて八神の名が言ふてある。其八神の名は神魂、高御魂、生魂、足魂、玉留魂、大宮乃賣、大御膳神、事代主神であつて、萬物の宗源たり、發生の靈たる神々で、實は皆「ムスビ」の神々である。

「ミューズ」は「ムスビ」

宮中八神の御名を見ても、大抵「魂」の名があつて、こゝに比較研究の歩を進めると、「魂」なる語は「ミューズ」と同じことが知られ、希臘に所謂「ミューズ」は日本の宮中八神に當ることが明瞭になつて来る。

元來「ミューズ」の語は英語流の読み方であるが、之を希臘流でやると、「ムーズ」又は「ムーザ」で、日本で「身狭」と書いてある人名地名は其れである。又た「武藏」なる語も「ムーズ」を語幹として「ムザイオン」の短かくなつたものである。

る。(Mus, Muse, Musicians)

今若し「ミューズ」なる語を「Muse」と云ふ具合に切つて讀むときは何のこととはなし「ムス・ヒ」となるのである。即ち「Mus」は「ムス」たることは説明を要せぬ、羅馬字「」は日本字「ヒ」と同じ字で、「ムスヒ」の發音は明瞭に出で、所謂希臘の「ミューズ」なる神は、日本の「魂」の神と同じであることが確證されるのである。

九のミューズと八神との對照

ミューズの神々は産靈の神であることは、以上説いた所で明瞭であるが、其一つ／＼のミューズと産靈の神々とは果して一致して居るかに就ては、餘りに専門になるから此に略して、たゞ其對照のみを擧げることとする、乃ち、

産靈(ムスビ)	ミューズ
高御魂	(一)クリオー
神魂	(二)カンリオベ
生魂	(三)エラト
足魂	(四)テルブシコレ
玉留魂	(五)エウテルベ
大宮乃賣	(六)ウラニヤ
	(七)メルボメネ

大御膳神……………(八)ポリムニヤ
 事代主神……………(九)タリヤ
 ………………(一〇)アポロン

で、日本の神々の名と、ミューズの名とは、其意味に於て同じである。

特に面白いのは、希臘のミューズの首領はアポロンと謂ふ男性の神で、之を「ミューサギテ」と謂ひ、ミューズの指導者を意味するのであるが、日本では、これが、八重事代主神のことで、「アポロン」とは「八重」を意味し、此神は、「御尾前の神」と云ひ、ミューサギテ(Musasigite)のことである。猶太教では之をモーゼとして傳へ、後代日本歴史では日本武尊として居るが、其説明は略する。

ミューズ崇敬の國家——日本あるのみ

太古の希臘人が是等ミューズを尊敬したことは有名であるが、實は是は日本から出た神々で、日本人は特に是等を尊信し、單に古代ばかりでなく今日と雖日本皇室は、宮中に八神殿を設けて祭り給ふのである。

西洋の美術家等が、ミューズを尊敬するのは知れた事だが、日本民族の首長たる皇室が、是等文化・平和の神たるミューズを祭り給ふと云ふが如きは、此大世界上に果して他にあるか。

日本の皇室は、日本民族全體を代表して、此文化と平和の神たるミューズを祭つて居給うのであるが、其れを知らないで、世界には日本を稱して軍國主義だの侵略主義だの云ふ者等がある。彼等は實に目がつぶれる勿體ない事を云ふ者と云はねばならぬ。

ミューズの土地

太古の日本は、此通りに文化と平和主義とを希臘方面に與へて居る。そして是等ミューズの土地は東歐のバルカン北部、昔のムシヤであつて、日本開闢の神々の土地である。今諸の魂と、其土地とを表にすると、——

高皇產靈……………スキチヤ(東歐、西亞の間)
 神 魂……………ミシヤ(東歐)
 生 魂……………トラケー(バルガンの中央部)
 足 魂……………クウリヤ(黒海の北部)
 玉 留 魂……………ツリバリ(トラケーの西部)
 大宮乃賣……………ルーメリヤ(バルカンにあり)
 大御膳神……………スキチヤ・レギイ(黒海の北部)
 事代主神……………(本地波斯)

希臘神話などには、ミューズ達はビエリヤの山の北側に其宮居があると云うて居るが、彼等はビエリヤは希臘内の小さい地名と思つて居るが、實はビエリヤとは希臘のテスサリヤの北一帯の總稱で、其地の北——即ちバルカン諸國がミューズの土地なのであるから、日本の民族にはバルカン民族と其土地との關係が大にあることを心得て居らねばならぬ。

猶太人に與へし感化

日本人は素より、西部亞細亞、東部歐羅巴から東漸した民族である、其西方に居る時代に、猶太人は素より日本史上に現はれ、日本には非常に世話になり、又其獨立國を造る時は、オシロ・ワケ即ち景行天皇の盡力に依つたことは西洋歴史に書いてある（勿論此時代の日本は、今の此島國では無く、埃及であつて、忍呂別天皇はオシリスの神として傳へられて居る。埃及神話に據ると、此オシリス（忍呂別）の神は、大軍を率ゐて世界を巡歴したが、決して其武を用ゆることはなく、音楽と美しい言葉とを以つて人々を懐け、人生に有用な智識を與へ、人情を和げ、世界の人々は「世の救主」と謂ふたとの神で、世界を文化的に統一教導するを精神とし玉うたのである。後世此神はモーゼスとして傳へられて居る。思ふに猶太人は「埃及・日本」に來て居る時に、世界平和の大理想を學んだのである。

日本の「祝詞」とイザヤ書

猶太人の神政主義は高尚なものである。此精神は耶蘇に流れ込み、耶蘇教から西洋諸國を感化したものである。彼等は大神エホバが、正義を以つて人間界の政治を行ふ時は、理想の政治が行はれると信じ、其エホバが君臨し玉ふ爲めに其準備をせねばならぬことを云ふて、次の如く言ふて居る——「汝等野にてエホバの途をそなへ、沙漠に我等の神の大道を直くせよ、諸の谷は高く、諸の山と岡とは低くせられ、曲りたるは直ぐ、崎嶇しきは、平にせらるべし」と。

これは日本神典祈年祭の祝詞の内に「辭別きて伊勢に座す大神神の大前に申さく」と云ふもの、中にある言葉たる「……長道間なく立ち續けて、狭き國は廣く、峻しき國は平けく」と云ふ句を取つたもので、日本の祝詞は、舊約書のイザヤ書よりも古い趣があつて、日本がまだ西の方へ居た時分、猶太人は、日本から此偉大な思想を學んで、之を其聖書中に取り込んだものたる事が知られる。

「イザヤ」と「伊勢國」

右に出したイザヤ書の句も、日本の祝詞の句も、何れも有名な句で、世界平和の準備を促がすものであるが、此舊約書中の最大預言者たるイザヤなる名は、實はイセヤ（伊勢國）と同じ言葉である。其れだから祝詞には「伊勢に座す天照大御神」と云ふて居る（けれども此伊勢は勿論日本伊勢でなく、イザヤの國たる波斯、アススリヤ伊勢のことである。）

舊約書の此大思想から、西洋方面の神政的平和主義の理想は與へられたものであるが、其最初は日本の「祝詞」から出たものである。——それでも日本は軍國主義を理想にする國と言はれねばならぬであらうか。

帝國主義

世に帝國主義なるものがあつて他國を侵略し併呑し天下を自國に統一するを目的とする主義であると解して居るが、實は其れは誤解に出たもので、其起原を尋ねると、諸民族が各地方に疆界を區畫し、互に相争ふて居るは悪いから、之を平定し、平和に統一するとの考から出たものと思はれる。

神武世界統一の大詔

此の世界の統一の平和主義は日本の高天原以来の主義で、天の下四方の國を安らげく平らげく、治めることを旨と爲し玉ひ、日本建國の第一天皇たる神武天皇は、各地方に「邑に君あり、村に長あり、相争ふて居る、我れ之を平定して、天下を一つにしやう」……國境を撤廢して、天下を高天原政治に統一しようとの考へである。

天業恢弘

實に神武天皇の聖旨は偉大なもので、全世界は其目的であつた。其東征の時の詔は「天業を恢弘し、天下に光宅せん」とのことであり、東に行き玉ふて、宮室を建て玉ふ時の詔は「六合を兼ねて都を開き、八紘を掩ひて宇と爲さん」であつた。(神武天皇は現日本島國でなく、阿弗利加のセネガルから、東して希臘に遷り玉ふたのである。)

アレキサンドル大王。羅馬帝國。露國のビョートル帝

此世界統一の理想を實行せうとした第一のものは希臘のアレキサンドル大王であつた。古代の羅馬帝國は日本の支族であつたが、又た神武天皇の理想を行ひつゝあつた。後世には露國のビョートル大帝の世界統一を遺詔したとの傳説があるが、其れは實は神武天皇の理想が、ビョートル大王傳に混入したものである。何故ならば「ビョートル」とは「磐」を意味し、――

神武天皇「磐余彦」

で、「磐」の意味同じく、又た神武天皇の「秋津洲、大和」の命名は南部露西亞、ダニューブ、別名アギツ地方で、このことであるから、其れがビョートル傳に混つたのと察せられる。

後世の帝國主義なるものは侵略主義の別名のやうになつて居るが、實は天照大御神や、神武天皇の、「天業恢弘」又は「天の下四方の國を安らげく平けく」の思想が亂用されたものに過ぎぬ。

平和の源泉日本

此の通り、日本は希臘にはミューズ即ち産靈の神々の感化を與へ、猶太民族にはエホバ(日本の大物主神)の平和的の理想を與へ、又た政治的には世界人類の大平和を企てた者である。特に國家的に文化平和のミューズの神を祭ると云ふ國家が、日本以外に世界の何處にあるであらうか。日本の皇室が宮中に八神即ちミューズを奉齋し玉ふことを世界が知つたなら、世界は日本に對して感謝と歎美とを傾け盡くすことは疑ひない。

正義と武力の神

けれども我等は文弱を意味しない。正義と威嚴の爲めには古來世界を震慄せしめるものが有つた。西洋人の所謂トールの神、ジンゴの神、オーディンの神の如き正義と大武力の神は、日本には豊浦(仲哀)・神后、應神の神たり又た天皇であつて、殊に西洋人が恐るゝジンゴイズムなる語は、神功皇后の御名から出た言葉で、此女帝

は『正義』の女神である。此女帝の日は金曜日で、西洋人等が、謹慎恐懼する日である——其れは此正義の女帝の日だからである。

水曜日は、ラーチンの日、應神の日

木曜日は、トールの日、豊浦の日

金曜日は、フリヤ(ジンゴ)の日、神功皇后の日

であることは、日本人たるものは、十分之を記憶して、世界にも、日本太古には此神たる天皇のあつたことを考へしめねばならぬ。

源氏の空蟬と、プラトーンの空蟬

——槍の権三とお齋

——ゴンザゴとバプチスタ

——孔子浴沂の楽しみ

プラトーンの空蟬神話

プラトーン的全集中には、他に無い特殊のプラトーンの神話や比喻が澤山あつて、其中、夏に關したものに空蟬神話の面白いものがある。

ソークラテースの友人にファイドロスと云ふ青年が有つた。一日學院に倦んで、其先生ルシアスの著した戀愛可否論——戀愛の品定と云ふやうな一と卷の論文を懷中して散歩に出た所で、ソークラテースに逢ふた。ソークラテースは此青年の懷中に一卷あるを認めて、多分其れなりと推測し、切に其論文の閱讀を乞ひ、途々種々の談話をしつゝイリスソス河の畔に来て、彼方に、見える籬木(ブレイン・ツリー)の本に息んで尙ほ哲學上の話を進めることにした。兩人は其木の本に達して其所に緑の草の上に息んだ。時は夏の日盛りである。談話を續けて居る中に、ファイドロスは疲勞を感じたか、聊か眠を催した様子である。けれども蟬は樹の上に頻りに鳴いて居た。ソークラテースはファイドロスの眠むたげな様子を見て取り、話頭を一轉してファイドロスの眠氣を醒まさうとして、一つの質問を提出して謂うた。

「君は時に、蟬の神話を知つて居るか」
「知りませぬ」

「知らねば話して聴かさう」と語り始めて言ふに——「蟬は始めは人間であつたが、非常に音楽が好きで、或音楽を聴いて、其面白さに、其れに聴き取れて食事をせず、たうとう死んで仕舞つた。其所で學問藝術の神たるミュージは此人間を憐れみ、其身を變へて蟬と化し、ミュージの御使番とした。其れだから蟬は梢に無意味に鳴いて居るやうではあるが、實は神の使でつて、吾等二人が此所に晝寝をしたり、或は惰けて居ると、蟬は上から我々を見て、其勤惰を神々に報告する。其れ故に吾等は決して惰けたり、晝寝をして居てはならぬ。常に思想を錬り、哲學を修めねばならぬ」と。其れからソクラテスは戀愛の神聖を語り、所謂「プラトニック・ラブ」なるものを説いたのである。無意味の言語を形容するに蛙鳴蟬騒など云ふが、此う見ると蟬は無意味の蟲類で無いらしい。此空蟬には歴史上非常に深い意味があつて、十分に吾々の問題にする價值がある。が然し——

何故蟬が

其通りに教訓及び歴史上の意味を持つて居るかに就いては、「蟬」或は「空蟬」の語は何を意味するかを研究せねばならぬ——吾等は夏の日中と雖研究を止めて晝寝をしてはならぬ——夏と雖、盛暑と雖、晝寝や遊惰の爲めに神が作つたものではない。蟬とは何を意味するか。

蟬はウツセミと謂ひ、現身、實在^{おほせ}をウツシミと謂ふが實はウツセミはウツシミの變化で『希臘語 ^{ウツセミ}Utssemi』を語源とし、其語根は ^{オウツセ}Ouzze。日本語「命」^{オウツセ}「教へ」で、聲、神聖の聲、警戒、現身、本體等を意味するので、文字では空

蟬と「空」の字を當てゝあるが、それは只發音の假字で、實は現身、現在、實體を意味し、其實體たる「ウツセミ」の有殼を「もぬげの殼」と言ふのである。

さらば空蟬の言葉の中には、神聖の聲、警戒、現身等の意味が有るから、プラトーンの蟬の教訓的神話が出る。單に「蟬」の語源は ^{オウツセ}Ouzze で生命、活動、騷擾等を意味し、此點から「蟬騒」の熟語が出る。

源氏の空蟬

此プラトーンと同じものを日本の文學にしたものが、源氏の空蟬である。空蟬の卷の前に、木^キの卷があり、學問のはなしに次いで戀の品定め——所謂雨夜の品定めなるものもあり。源氏の御厨子にいろ／＼の紙なる文があつて、頭の中將が其文を見せよとせんがんだ。プラトーンに在つてもフアイドロが學院の強勉に倦み、ルシアスの戀に関する論文の巻物を懐中して居てソクラテスが其れを見せよと謂ひ、其朗讀から、戀愛論に移つて居る。そして光る源氏の好色は「人に許るされたる」通り者で、プラトーンの内論の著作者たる「ルシアス」なる人名も「人に許るされたる」を意味して光源氏とルシアスとは同じ人物であることを示して居る。又たプラトーンの著たる「フアイドロス」(Plutarchos)篇も、密木を意味し、又た「からを棄つる」もぬげの殼を意味する人名に取つたのも面白い一致では無からうか。

プラトーンの蟬は、人間が木の下に身を變へて蟬になつたと謂うてあるが、源氏には「空蟬の身をかへてける木の下になほ人がらのなつかしきかな」とあるのも亦偶然の一致では無いやうである。

空蟬の宿

源氏空蟬の宿は夏の住居のなつかしいもので「水の心ばへなどさる方にをかしくなしたり。田舎家だつ柴垣して、前裁など心留めて植ゑたり。風涼しくて、そこはかとなき蟲の聲々聞え、鶯繁く飛びまがひてをかしき程なり。」此家に光源氏の君は中神の方違の爲めに來た。

御註文の湯上り美人

然し源氏が此家に來たは家の住居の好いのを愛づる爲めでもなく、又た中神の方違へと云ふは口實。實は軒端の萩と云ふ女があつたの事を聞いて、其れを目的として來たのである。此女性には空蟬と云ふ年若い義母があり——人妻であるが、聊かあだつばい向きで、近松の槍の權三のおさいのやうである。

此兩女性は夏の美人——誰れやらの御註文の『開放的美』「甚しく男の目を喜ばす」的で、光る源氏は此家に來て、物陰に身を隠して此二人を見た。時は宵。其時二人は湯上り姿。差向うて碁をうつて居た。源氏の心をかけて居た方は濃き綾の單襲、頭つき細やかに、手つきやせくとした姿。若い方はいと白う、をかしげにつぶつぶと肥えて居て、白き羅の單襲、二藍の小褂こまだつものを、ないがしろに著なして、紅の腰ひき結べる際まで、胸あらはに——と云ふ全く開放的の姿、是等は現代の文學者の恍惚たる所と思はれる。

其夜源氏は事の間違ひで空蟬の室に行たが、衣脱ぎすて、彼女は遁れた。源氏は其衣を見て「空蟬の身をかねてける木の下に」の歌を疊紙に書きすさびて、甚だ失望して此家を去つた。

空蟬の史跡探検

謡曲「空蟬」の諸國一見の僧が空蟬の舊蹟を尋ねた時の記事には「空蟬の葉に置く露の木隠れて」「葛城にかゝる久米路の岩橋や絶えにし跡は白雲の」「星の逢潮も程近き」「恥しながら中川の宿りはこゝも軒舊りて、數ならぬ伏屋に生ふる名のみは簪木の、梢に鳴くは空蟬の」とある。源氏物語は印度の地名小説であることは度々言うた。空蟬の地は緬甸のメグナ(京)河とスルマ河との中間にある川——之れが京極中河——で、其地に空蟬、軒端萩、又た湯あみ及び脱衣を意味する地名がある。即ち

空蟬の地は——ハビカンジ(Hubigan)羅典語源 Hiba 前に言うた希臘語オツソミと同語で、空蟬、現身、神の聲、衣服、方違の爲めの宿等を意味し。

軒端の萩の地は——其東のムルキ・バザー(Mulvi-Bazar)「萩、軒端」、即ち軒端の萩の地であることは簡單明瞭、簪木湯あみの地は——其南方バート・キヤ(Batcha-Batchia)簪木、湯あみ、露の木等を意味する。

勿論源氏の地は今の日本の京都あたりでは無い、吾々の史跡探検は小さな眼界の國文家や、井底の痴蛙的の歴史地理家のする事と趣が異ふ。

孔子浴沂の樂しみ

孔子は吾新研究者の材料供給者である——彼れは勿論支那人ではない。緬甸アラカン(犬)の人だ。「葬家」の地たる古代地名アハヤ(悲歡)の人である、一日門弟子等を集めて各其志す所を問うた。其時曾點なる者は他の弟子

等の眞面目、不風流なものと異うて、「暮春は春服既に成り、冠者五六人、童子六七人、沂に浴し、舞雩に風かれ詠じて歸らん」と言うた。孔子は非常に愉快に感じて「吾れ會所に與せん」と賛成した。所が此「沂に浴し」とは右に謂うたバート(浴)、キヤ(沂)の事で、舞雩に風かれ」とは希臘語 $\rho\eta\iota$ 風吹く及び聲高く鳴くことを意味し、「風涼しくして」の形容と、蟬の聲々」とを表はして、空蟬の宿たるヘビガンジの事を謂うたものである。若し日本の謡曲作者が孔子を描いたならば、必ず浴沂の楽しみの中に、孔子が湯上り美人に逢うたことを書いたであらう。孔子が齊に在つて韶を聞き、三月内の味を知らず、圖らざりき樂を爲すの斯に至らんとはと言ひ、樂しみ以つて憂を忘れ、老の將に至らんとするを知らずと言ひ、又た信じて古を好み竊かに我を老彭に比すと言つたのは、全くプラトーンの中の音楽好きの人間が肉の味を知らず、老の將に至らんとするを知らず、死んで蟬に化つたことと同じである。源氏物語は決して單に好色本では無い、孔子は不風流漢ではない。

比較研究の愉快

前に此の空蟬なる女性の性格は、近松の槍の權三のおさいと云ふ女性のやうであると云うたが、おさいは齋戒沐浴の「癪」で、湯あみを意味し、此場合の空蟬は湯上り姿であるなども亦同じ人物たることを示して居る。シエクスペアの「ハムレット」の劇中劇にゴンザゴと其妻、パプチスタなる者があつたが、此ゴンザゴは槍の權三であり、パプチスタは沐浴を意味しておさいと同じく、空蟬と同じである。又其劇にルシヤナスなる横戀慕をする者があるが、これは光源氏其人で、ルシヤナスは「人に許るされたる」を意味し、源氏は「人に許るされたる」人であり、又たプラトーンの方でのルシヤナスなる者も同じ意味の名の人で、此一段の比較は和漢洋に跨がり、源氏、プ

ラトーン、シエクスペア、孔子等に連絡が付くので、甚だ面白い研究材料である。

ソークラテースは蟬か

ソークラテースは蟬かとは奇異大膽な質問、然し其傳記には大疑問がある。かの和泉式部なる女性は、謡曲「東北」には鶯としてある所などを見れば、ソークラテースも蟬であり得ないとも謂へぬ。プラトーンがソークラスをして蟬の話を爲さしめたのは、暗に彼れは蟬であることを示して居るが、其名ソークラテースの「ソー」の語源は $\sigma\omega\sigma$ 即ち蟬で禪と同じく、ソークラテースは禪司(師)と譯す人名である。司或は師は「命」或は「教」で其語源は $\sigma\sigma\omega$ 即ち前に謂うたウツセミと同語である所を見れば彼れは蟬の現化と謂ふべきである。

プラトニック・ラブ

殊に前に言つた蟬の神話を書いてある「フアイドロス」篇の有名なプラトニック・ラブなるものは、戀愛の神聖を説き、愛する者同志が此地上の生命終る時は其靈魂は肉體の衣をぬぎ棄てて——蟬脱して——相提携して天に昇ることを説いたもので、矢張り蟬脱神話である。アルキピアデースなる弟子がソークラテースを讚美して一種のマルシヤスの神と謂うた。マルシヤスは笛を以て妙音を發して天地を感動せしめるが、ソークラテースは笛に由らず、何等樂器を用ひずして、單に言葉のみで之を能くすると。「言葉」とは希臘語「ウツセミ」である。且つマルシヤスとは證明者、殉教者を意味し、蟬は藝術の爲めに死んだ人であり、又梢の上から下界の人間の動情を見分證明するとのプラトーンの神話は、ソークラスと蟬とを結び付けるものと謂ふ可きである。アルキピアデースが

「我れは耳を塞いでソークラスの前を遁げる、之れは其談話の引力に由り其側に坐して老の將に至らんとするを知らず、死ぬるやうになるからである」と言うたのは、孔子が韶（此字は「音」偏に「召」で音を以つて人を引き付けるを意味し蟬の事と思はれる）を聞いて老の將に至らんとするを知らずと言ひ、又た蟬神話中の音楽を好む人間が音楽に聴きとれて死んだと同じ事を謂うたものである。（此に一言して置くがソークラテースは希臘の人では無い。印度太古の傳説が希臘に傳はつたのに過ぎぬのである。）

空蟬神話の研究で我等は意外の所に導かれた。之に由つて、源氏物語の異常のもので、兎ても從來の國文家等の頭腦の力に超越したものであることや、論語や、ソークラテースの書物なども從來の學者の考へた所と大に異ふことも明瞭となつた。吾等は信ずる——蟬は吾等の研究を樹梢から見居て、其勤勉であつた事を天に報告し、ミニューズの神々は吾等に御褒美を賜はることを。

潮來と、ゼニスと、印度の室君

何故でせう

潮來舊記の潮來と、伊太利のゼニスと殆ど同じであるは何故でせう。ゼニスで有名な遊散船たるゴンドラと南洋土人の操つるカノーとは殆ど同じ様なは何故でせう。其ゴンドラと同じ地名ゴンドラなる古代名稱が中印度にあるは何故でせう。其ゴンドラなる土地に室君を意味するダムラなる港が海岸に在つて、其室君記事が日本謡曲の「室君」の記事と同じなのは何故でせう。謡曲「室君」の中の章提希夫人（ちぢけきみ）なるものはホメーロスの百合若の妻イタケ夫人と同じであり、イタケ夫人は又たイタコ（潮來）夫人であるのは何故でせう。日本の潮來と、伊太利のゼニスと、印度の室君と、何か關係は無いでせうか。

私——木村鷹太郎——は足一歩も日本から外へ出た事のない人間。私かに自ら古事記の「曾富騰」（そへんと）に比して居る。彼れ曾富騰は、足は行かねども天下の事を盡く知れる神である。獨逸のカントは自身の居る所から五十里外に出た事の無い人で、而も世界地理學の教授であつた。老子は「聖人は戸を出でずして天下を知る。出るを益々遠く、知ること益々狭し」と云ふて居る。列子は大に遊びを好み、大に天下に遊んだ人だが、或時壺丘子千なる達人にヤツケられて其以後は外遊をせず「外遊を務めて内觀を知らず。外遊は備はるを物に求め、内觀は足ることを身に取る。足ることを身に取るは遊びの至れるなり」と云ふやうに一變した。吾輩は嘗て洋行無益論をしてハイカ

ラ連から大分叱られた事もある。其れは扱て置きとして、吾輩は古人を友とし、地圖を机上に繙かぬ日は一日も無い。遊びが好きだからである。吾輩の夢は全世界を駆け廻つて居る。

水の都ゼニス

大正五年の夏、朝日新聞の大庭柯公君が潮來とゼニスに就て一寸書かれたことがある。知人小寺健吉君が其時潮來の寫生的畫を文展に出された。小寺君に聞いて見ると潮來の實際は大庭君の書かれたやうな趣は少しもないとのこと(吾輩は實際潮來は知らぬ)。此に於て研究心は又た起つて來た。

東洋は世界の古國、印度太古は世界文明の卒先者。比較研究に據ると、西洋も其文明も、全然東洋からの移民及び移寫で、ゼニスの在る伊太利も、素より東洋移民國で、「伊太利」とは「馬來」半島を希臘語で寫したものに過ぎぬ。

アドリヤ海の奥なるゼニスは水の都で、海の中に家を建て、水を以つて街道にし、舟を以つて車に代へて居る有名な所である。意ふに湖上生活の發達したもの、やうである。

ゼニスには有名な、三ヶ月を浮べたやうな「月の御舟」のやうなゴンドラなる舟がある。昔は此舟に彩色をしたり、畫を畫いたりして最も華やかなもの、所謂畫舫で、其れに家形をしつらひ、美しいカーテンを垂れ、美姬を載せて琴を弾かせなどしたものであつた。今でも其趣は残つて居るが餘りに奢侈だとのこと、今では此ゴンドラは黒塗になつたとのことである。

ゼニスには大運河にリアルト橋なる有名な橋があることを忘れてはならぬ。

潮來と、ゼニスの「十二橋」

潮來には素よりゼニスの趣は無い。然し只だ水運の町である點だけは似て居ると云へば似て居る。潮來の昔を研究する材料は吾輩何も有たぬが、大庭柯公君の引用して居られる所を借りた丈けでも十分研究の材料はある。詩佛なる詩人の詩に「試從二十二橋頭一望、何水何橋無月明」とあるが、是れは果して我常陸の潮來記事であらうか。潮來の實見者は之を否定する——乃ち吾潮來の記事では無い事になる。吾潮來に果して「十二橋」なる橋があるらうか。詩の十二橋とは橋を十二數へたことを意味するではなく、十二は橋の名と解せねばならぬ。

吾々は詩佛の此詩は伊太利ゼニスのリアルト橋よりの眺望を詠じたものと斷定する。リアルト橋とは *Rialto Bridge* 高く、深く、再思、沈思、思案、ためいき、眞實等を意味し、バイロンは此橋を「思案橋」即ちブリッヂ・オブ・サイスと譯して居る。又たオトエーの詩に不思議なものがある——

On the Rialto ev'ry night at twelve.....リアルト橋頭毎夜十二時

I take my evening's walk of meditation... 我は夕の思案に歩む。

こゝに十二時とあるは十二橋頭ではないか。十二橋頭はやがて又た思案橋である。日本の詩と西洋の詩と、此うも一致するは——何故でせう。(今のリアルト橋は一千五百八十八年建造、大理石)

家は河中に作り出し

潮來舊記に「家は河中に作り出し、舫町に乗りて川向ひの出島に到る」とあり、吾潮來も聊か其趣無きにしも非

すだが、事更に言ふべき程家は河中に作り出しと云ふ程のものは無く、川向の地に行くには、河邊の町或は小島が海邊にある港などは皆是れで、事更に言ふべきことで無いのに、事更に此事が云ふてあるは、ゼニスゼニスの水中の家に當つて居る。此に「舫町」に乗るとあるが舫町とは何であるか。何でも無い、英語のボート、佛語のbateau、即ち短艇の發音である此潮來舊記なるものは全くゼニスの舊記——或は印度ダムラの舊記——であるが、ゼニスの如き遠隔の事が如何にして日本に傳はつて居るかに就ては、日本民族の東漸史を研究したら解る。(希臘のアカル・ナニハの地圖が、難波古圖として古から日本に傳はつて居ることを考へたら思半に過ぎるであらう。)

韋提希夫人——湘夫人

ゼニスの語源は Vene, Zia で「來れ、若」即ち若來れを意味するが、潮來は Titha, Ka で「若、來」で、「潮」は「アカ」と云ひ、「若」を意味し、又た希臘語 *ros* と云ひ、「直」とも云ひ、又た之を翻譯すると *Tit* となるので、それに「來」を付けるとイタコとなり、ゼニスと同じ意味の地名となるのである。謡曲に「室君」なるものがある。印度オリッサ海岸のダムラ即ち室の津を語つたもので、其中に「韋提希夫人」なる女性があるが、是はイタケ夫人或はイタコ夫人のことで、イタコとゼニスと同意義の地名とすれば、兩者の間に母國或は植民地の關係が有ると察せられる——素より東洋は西洋の母國である。又此ダムラの室の津の事が屈原の「楚辭」の湘君及び湘夫人の篇に居て、其記事が又た水の都たるゼニスと同じものであるのは面白い。屈原は支那人ではなく、實は印度太古の者である。

其文の中に「室を水中に築き……百草を合せて庭に實て……汀洲の杜若をとる」の句がある。室を水中に築くは

ゼニスのやうに、家は河中に作り出してあると同じではないか。百草とは菰、草別名花かつみのこと、杜若とはあやめの事。其所で日本に、「潮來出島の菰草の中に杜若さくとはしほらしや」の歌がある。意ふに此歌は元は印度の潮來夫人のダムラの歌のやうである。

印度の室君

屈原の湘夫人の地は研究上印度オリッサのダムラであつて、詳細の地理は知らぬが屈原の記事に據つて潮來舊記と同じものと思はれる。ダムラは *Damar* の變化で「室」を意味し、又た謡曲の「室君」の「友呼びかはす」を意味し、室女を意味し、「恨ぞまさる室君の行く船や慕ふらん」の土地である。此地の總稱オリッサとは「棹立て」即ち「室君」の「知るやしるしの棹立て」を意味し、彼等の奉仕る韋提希夫人とは潮來夫人の事で、室の女として天文獸帯及び星坐の室女宮とは此女神を表はしたものである。

ゼニスには、前に謂ふた沈思、思案の十二橋即ちリアルト橋はあるが、今此印度の室の津には此名稱の橋があるか無いかは知らぬ——知る人が有らば教へて欲しい——が、其リアルトなる語に當る意味の文句は謡曲「室君」には有り／＼と出て居る。

『不思議や異香薫じつ、和光の垂跡韋提希夫人の姿を現はしおはします……所は室の海なれや、山はのぼりて上求菩提の機をすゝめ、海は下りて下化衆生の相をあらはし、實相無漏の大海となつて花ふり異香くんじつ』とは即ち *Railto* 橋、別名十二橋の名の意味である。殊に「實相無漏」なる語は *Railto* 即ち英語の眞實等を意味する *Reality* なる言葉に當つて居ることが知られる。現日本の室の津も潮來もゼニスも、實は印度ダムラの寫しで

あるが故に、三者通じて同じものがあると考へられるのである。

此室君はホメーロスのオデッシーにはセイレンなる妖女——遊女——として表はされ、行く船を切りに呼び止めた話があり、屈原の湘君にも「君行らず、君を望めども未だ來らず」の句がある。

「潮來」と書いて——何故イタコ

潮來れと書いて何故イタコと云ふか。屈原の湘君は來れく^くと行く船を呼び留めようとした、妖女セイレンは百合若來れと呼び留めようとした、謡曲の室君は行く船を慕ふた、日本の俗語に「沖の大船磯ばたに、三十三反て、錨をまき揚げて、面舵、取舵、沖あらし、向ふの島から女郎衆が出て來て招くやら、見るより船頭さん櫓を立て、錨をドンプと港入り」と云ふがある。これも亦同じく若來れの潮來歌で、こゝに櫓を立てるとあるは同じく室君の船の棹立てである。そして潮來の語源は前に謂つた如く、*Itigard*で「來れ若」を意味し、「若」は又た阿伽即ち海潮の事で、又た潮を海若と云ひ、イタコは潮來れを意味し、ゼニスも潮來と同じ意味の別語の名である。

ゼニスで有名なゴンドラ舟は矢張り東洋から傳へた者で、明かに南洋土人のカノー舟の發達したものと思はれる。印度ダムラの在る土地の古代名稱はゴンドラ^{ゴンドラ}國で、ゴンドラ^{ゴンドラ}(Gondali)の語源はコンタリ^{コンタリ}(Contali)で「棹立て」を意味し、棹は又たカノー(Cano)の譯が付き、此ゴンドラがゴンドラと變化したもので、ゴンドラ舟は「棹立て」又は「カノー」舟と對譯して善いのである。ゼニスでも古はそうであつたことだが、ダムラに在つても古のゴンドラ舟は實に見事なもので屈原の記事でも察せられるが、忠臣水滸傳にも此地の船を形容して「畫船の錦の纜を解き桂の櫂、蘭の槳、月下に櫓を鼓き、明月を賞し、俱に歌ふ」とある。所謂畫舫なるものは是れであ

謡曲には「月の御舟に棹さして『室君たちを舟に載せ囉物をして神前にまゐる』とある。是れは印度タムラの記事であるが、又たゼニスのゴンドラの月明の遊びも之と同じで伊太利歸りの人が念頭に忘れ得ぬとのこと。詩人バイロンのゴンドラの觀月も有名なものである。

潮來とゼニスと室君とに關して「何故でせう」の問題は是れで解けたことゝ信ずる。

鏡 花 水 月

— 豈偶然ならんや —

『天の以て我に與ふる所のもの、豈偶然ならんや』とは蘇老泉が天より與へられた自分の力量を信じて其れを發した言葉である。吾等に於ても此確信は勿論有るが、今吾輩が此に『豈偶然ならんや』と言ふのは蘇老泉の言ふ意味とは別で、吾輩が史學其他に關して比較研究をするに當つて、西洋や日本の種々の事件が一致符合して居るのは、決して偶然ではなく、其一致符合すべき當然の理由ある點に於て豈偶然ならんやと言ふのである。

今此に何等組織も系統も付けず、日本及び西洋に傳はつて居る種々の文學上のはなしで、我等の氣の付いたものを四つ五つ比較して見ようと思ふ。其比較研究が意外な面白い結果を呈して來るのは——豈偶然ならんやである。

松浦佐用姫と女詩人サホ媛

日本書記及び萬葉集等に出て居る大伴狹手彦の妻松浦佐用姫の話があるが、之れは希臘のサホ媛、又たサッホとフ、ウンとの傳説と同じものであるのは面白い。

日本の傳説に據ると大伴狹手彦が朝命に由つて藩國に使用する時に、其妻松浦佐用姫は別れを悲しんで高い山の嶺に登り、遙かに離れ去る船を望んで、悵然として肝を斷ち、黯然として魂を銷し、遂に領巾を脱いで之を麾つ

た。傍の人涕を流さぬ者は無かつた。因て此山を領巾磨山ひれゆるまと名付けたとのである。希臘の傳説に據ると、

ミュージズとまで謂はれた女詩人

サホ媛はフ、ウンと云ふ戀人を夫にしたが、此フ、ウンは他に戀女が出來てサホ媛を棄て、二人で船に乗つてかけ落ちをした。サホ媛は、海岸の巖の上から其出帆する船を見て悔やしさにへ堪へないで、身を投げて死んだとの事である。今此二つの話を比較すると一は官命を帯びて出帆すると他は戀女と共にかけ落ちするとの相違はあるが、夫は出帆して妻が其れを戀ひ慕ふ趣は全く同一である。

佐用姫他はサホ媛

之れは同じ名の少しく變化したものであることは直に認められる。サホ即ち佐用の語原は希臘語 *Sōs* で *Sappho* と書き又た *Sōs* とも書くが、意味は棒又は立つ物を意味する人名である。男性の名は日本では狹手彦と謂ひ語原は羅典語 *Sōs*。即ち「立て」で希臘傳説ではフ、ウンと謂ふが、*Fanus* とは同じく「立て」を意味して、狹手と同じ意味を別語を以つて表はした人名に過ぎぬのである。さらば佐用姫傳説は希臘のサホ媛傳説と同じものであると言ふても誤りは無い。且つ希臘でもサホ媛の事は極めて不明瞭であるが、實は草木生々の女神で、日本の春の女神佐用姫と同じである。垂仁天皇の皇后狹穗姫も亦實は神話上の此女性に過ぎぬ。西洋でサホ媛の作つた詩と謂ふものがあるが、それは素より後人の偽作である。

此佐用姫及びサホ媛傳説の本地は印度南端のマヅラ縣で、日本では松浦縣とあるは其れである。此マヅラの名

は又たメヅラと變化し、又たメドラとなつてバイロンの海賊の妻メドラなる女性の名となるのである。

『海賊』の妻メドラと松浦佐用姫

『海賊』は英國詩人バイロンの傑作中の一つであるが材料は東洋のものが西に傳はつて、其れをバイロンが詩に作つたものである。海賊の大將はコンラードと謂ひ、遠征して出帆する時に其妻メドラが高い崖の上から其出船を見て、自分は或は見棄られたではないかと思ひ、非常に別れを惜しみ悲んで、戀死をした其光景は、全く松浦佐用姫やサホ姫の別れと同じである。且つメドラの名はメヅラ即ち松浦の變訛であるに由つて考へても、之れも同一傳説と謂ふことは否むことが出来ぬ。日本歴史の後世となつて、毛利元就の嚴島に陶晴賢を征伐する事は、バイロンの海賊がザイド(陶)なるものを征伐すると同じ事の別傳である。又元就の妻に大内義隆が横戀慕することとは、海賊の敵ザイドが其妾ブルナーに對する態度と、元就を責め苦しめる事と全く同じで、文句から言葉まで少しも違はぬ箇所のあるのは非常に注意すべきことと思ふ。尙ほ其詳細を知らうとする人は、バイロン『海賊』と、文耕堂淨瑠璃集の中の『河内國姥火』と、又た『後太平記』三十二卷、三十三卷あたりを比較せられんことを希望する。毛利元就の傳は太古の傳説を新らしい時代に繰り下けて、作り變へたものに過ぎぬ。尙ほ一層太古に遡ると是等の話は希臘神話のケウクスとハルキオネとの話に傳はつて居る。凡て是等の話の一致して居るのは元と印度に於ける同じ傳説が東西、古今に種々に傳はつたので——豈偶然ならんやである。

源氏「藤の方」とバイロンの「バリシナ」

久しい前の事であるが、吾輩はバイロンの詩「バリシナ」を譯した。其詩の主人公バリシナはアゾ公なるもの、若い後妻、艶美の質である。アゾ公の前妻にフゴなる伶俐で、勇壯で、美麗の一男子がある。されば人倫關係から言はゞバリシナとフゴは母子ではあるが二人の年齢は餘り多くちがはなかつた。所が此母と子との間に戀愛關係が成り立つた。逢ふ事も度重なつて遂に父アゾ公の耳に入り、アゾ公は大に怒つてフゴを死刑に處し、バリシナは或暗黒場裡に葬られて、どう云ふ事になつたか誰も知る者が無いとの事である。

バイロンが其艶麗の想流暢の韻律を以つて、バリシナとフゴとが後庭のあづま屋で密會する時の有様を歌ふ記事を記憶して居た頭を以つて、源氏物語の藤壺の更衣の事を讀むと、此女性が伊太利亞に傳はつてバイロンのバリシナとなつて居ることを直覺したのである。バリシナとフゴとがアゾの宮殿の後庭で會合する時の有様は——

『夕告鳥の高き調べの囀は、

今は樹の間にひびく時なり。

戀人たちの誓の言葉は、

其さゝやきの一語ごとに楽しき時なり。

そよ吹く風、近き水音、

しづけき耳には樂の調べと聴こゆなり。

花には露は軽くおきそめ

空には星は相逢へり。

波には深き藍の色、

木々の葉末は茶色の光、
 日は西山に落ち入りて、
 夕ばえの色、月の光に溶け行く時は、
 天は澄みたる暗さにて、
 おぼろにかすむ清さかな。

然りと雖、パリシナが其局よりおり立つは
 清き水音、聽かん爲めには非ざりき。
 夜の闇さにかの女の歩むは
 天つみ空の、光を見んが爲にも非ず。
 パリシナが、エステの園亭目指すとも
 其は爛漫たる、花の爲にも非ざりき。
 たとひ耳をばそは立つとも、他に優しき言葉を聽かん爲めにして
 夕告鳥を聽かん爲にも非ざりき。
 樹立の深き茂みより、忍の足音聽え來ぬ。
 今や彼女の頬は色青さめ、胸の動悸は高まりぬ。
 茂みの中より、小き聲はさゝやけり。

パリシナの顔は、始めて其紅に回へり、又た其胸ははりつめぬ。
 今一瞬時、さらば二人は相逢はん。
 其瞬間は過ぎ去れり、彼女の戀人は今や彼女の膝の近くにあり。
 *
 罪ある、嬉しかりし其場所を
 顧みしつゝ二人は去りぬ。
 又たの逢ふ夜の望と誓は、かけて交はせしとはいへど、
 今の別れは、永の別れとなるかの如く、二人はいと悲しみぬ。
 と息つきつゝ抱き合ひ、
 口と口とは、いや永久に離るゝことを好まざり」
 是れがバイロンの『パリシナ』の書き起こしであり、二人の會合の有様である。

パリシナは藤壺の更衣に比較—

すべきであるが、源氏物語其物よりも、其れを書きかへた種彦の田舎源氏第二編の藤の方に比較するが却つて
 明瞭と思はれる。何故ならば田舎源氏は、前には末松氏、近頃では與謝野晶子君等が只だ源氏物語を近世文に書
 き代へたばかりのやうな無意味の物では無く、種々の参考書や註釋本に材料を取り源氏物語に傳へて無い貴重の
 材料を用ひて居て、時には源氏物語以上の價值があるからである。

源氏物語及び田舎源氏に據ると、足利義政公の愛妾花桐に、清らで玉のやうな、めでたい男子が生れて其名を光氏と云つた。母は産後久しからずして死に、光氏は健全に成長して、文武の道種々の藝なども人に勝れた美少年となつた。父義政公には其後藤の方なる若い愛妾が出来て、年は光氏と少しがふばかりで有るが、光氏から謂はゞ母である。然し此母に當る人と此子との間に戀愛關係が起つて、館の後庭で二人が會合する話がある。此二人の會合は全くパリシナとフゴとの會合と同じである。

時は「日の入り果てし」夕暮の頃、場所は「庭とは云へど築山を遙かに廻りて程離れしかの人丸の社」「御燈の光影薄く、最寥々たる社の裡」、光氏は「手遊びの笛取り出だし合圖と思敷吹き鳴らせば、供をも連れず藤の方、築山の細道を廻りて、四下を窺ひく」「忍んで來よとのお捻り狀」「泉水の土橋を渡り身を潜め」と云ふ有様である。又た其終りに「水より清き御身をば小生故に濁らせませ……と抱きよせつゝ泣き給ふ」と云ふが如きは、パリシナの會合と一點の異もない。

然し人情東西二ならず、

戀愛の事は天下同じ故

此通り同じやうの事が東洋にも西洋にもある、同じなのは偶然であると云ふ人もあるかも知れんが、然らば此に語源學に由つて、是等東西の小説上の固有名詞——人名の比較研究をして見よう。固有名詞まで偶然に一致す利とは到底云ふことは出来まい。

足利義政は「東山」公であるが、パリシナの夫たるアゾ公は又たエステ公と謂ひ、*Estes* 東を意味する英語 *East*

と同語で *Estes* はアングロサクソン語ではエステンと謂ひ、エステ公は東山公であることは極めて簡単に知れるでは無いか。エステ公を又た *Asa* 公と云ふが、語原は *Asa* で *Asa*, *Asi*, 朝、東、葦等を意味し、又た足利の足の語である。然らば東山公足利將軍は、エステ公アゾと同じ名の人物と云ふことが知られる。

次にパリシナ (*Parisina*) の語原は希臘語 *Parisiinos* で「同様」を意味し、藤の方の本名は猪名野谷と謂ひ、語原は *Oenone* で是れ亦た「同様」を意味してパリシナと同じ名である。此女性の名の「同様」の意味は「亡せ給ひし御息所の御容貌に似給へる人」即ち先妻花桐の「お貌代」一顔容なら風俗なら花桐様に少しも違はず」との意味を運ぶ名である。

然らば光氏とフゴとはどうであらうか。光氏は「清らかなる玉の男御子」「世に珍らかなる形」「清寧と日立ち給ふ」健全なる「日出度き男子」で、是等の形容語を總て集めたものを希臘語で *Heros* と謂ひ之れがパリシナの戀人 *Heros* の名である。然らば此比較研究法を以てする時は光氏は同くフゴと同じ名の人物である。是等東西の小説の背景から、戀愛の關係、人倫の關係、人名の意義の同じ點を凡てから詮じ來ると、源氏物語の此一段は、パイロンのパリシナと同じものであるとの斷定は確實では無からうか。土地は素より緬甸のカルナフリ川口のキツタゴンで、此地はパリス又は「パリシナ」即ち「二つ相同じ」の地で、日本劇の隅田川の法界坊の二人お組の地、玉藻前の二人葛の葉の地であつて、現日本でも伊太利でも無い。新研究に據る時は、源氏物語全體は印度、緬甸、暹羅、東南塞の地名小説で、日本の地名は皆是等の地を寫したものである。源氏紅葉賀の卷は暹羅の地理小説で青丘、赤土を表はしたものの、胡蝶の卷は錫蘭島及び松浦(マヅラ)附近の記事、源氏六條の館はブラフマプトラ河とメグナ河と恒河との會流する地點のダツカを中心として印度緬甸を十字形の線で東西南西に四分したものであ

る。又た足利時代なるものも、決して舊派史家が信する如き、日本年表の時代では無いのである。此通り源氏藤の方とバイロンのパリシナと符合するもの——豈偶然なやんやである。

『妹脊山』と『ロメオ、ジュリエット』

附。四川及び雲南

日本劇『妹脊山』とシエクスペア劇『ロメオ、ジュリエット』とは同じものゝ變化である。枝葉の點に於ては素より異ふ事があり、どちらも其他に種々の材料が這入つては居るが、敵同志の家の男の子と娘とが互に慕ひ合ふてどちらも死んで結婚し、兩家が和睦すると云ふ大體の筋は勿論の事、兩家の名、又た其劇の人物の名なども日本劇とシエクスペア劇とは全く同じなのである。日本にはシエクスペア學者で日本劇に通じて居る大家も有る筈ぢやが、一向に御氣が付かれぬと見える。『ロメオ、ジュリエット』の翻譯もあるが、誰も之に就て比較研究などは爲た人は無いと見える。天は甚だ不思議なもので、門外漢たる吾輩如きものに、コンナ劇の研究までも同じ給ふとは思議では無からうか。之れも豈偶然ならんやと思はれる。『ロメオ、ジュリエット』は日本にも翻譯があるから記述は凡て略すことにする。妹脊山の芝居は大抵の日本人は知つて居る筈だから、是れも亦其記述は略すことにして、是等東西の劇に出る人物の名に就て比較研究をして、兩者全く同じであることを證明しようと思ふ。『ロメオ、ジュリエット』が日本の妹脊山であることは妹ジュリエットの家名をカブレット Capulet と謂ひ、英語の Couple 『妹背』結婚』配偶』を意味する語と同じであることが、何よりの簡單明瞭な『妹脊山』のヒントでは無からうか。然し今兩方の劇の重なる人物の表を作るならば、

妹 山 方

太宰の少貳國人……………カブレット家

女・雛鳥……………女・ジュリエット

背 山 方

大判事清澄……………モンタグ家

男・清船久我之介……………男・ロメオ

シエクスペア劇のカブレット家の名は前に一言した通り妹脊の契を意味する點に於て此人物の家を妹山と謂ふても誤りないと思はれる。日本劇では妹山は太宰の少貳國人の領地とあるが『國人』の語原は羅典系の *Coh(Cuma)* で國、組、結び付け、寄せ集め等を意味し、カブレットと同じ意味の人名である。カブレットの娘ジュリエットの眞の發音はユリエット即ち希臘語 *Juliet* が語原で、又た同じく寄せ集める、固める、結び付けること等を意味する名である。寄せ集めて固める事は又た『石』の意味となり妹脊山の雛鳥の母貞香に就て『石と意地とを向ひ合ふ』の句があり、又た雛鳥の言葉として『女の力の届かねば……………石になりともなり度い』の句があつて、ジュリエット即ち石が妹山系に關係あることを示して居る。

脊山の方の家長は大判事清澄であり、シエクスペア劇ではモンタグ家であつて、モンタグとは『山人』即ち『やまと』を意味する家名である。所が妹脊山の山の段の書き始めは『往古の神代の昔山跡(大和)の、國は都の始めにて、妹脊の始山々の中を流るゝ吉野川』とあつて『やまとの國』の事を謂ひ、『やまと』の大判事家はモンタグ家であることが知られる。其何故に此家の方を脊山と謂ふかは後に説明する。

其モンタグ家の子息ロメオ(Romeo)の名は Roma 即ち牡羊を意味し、其角のY字状に二つに別れて居る點から形容上何時も之れを「割判」、或は「判事」の意味に用ひ、大判事・清澄の名に當つて居る。尙ほ詳細の比較研究をすれば善いが此には之を略して置く。(然し此語源説は最も眞實だから一言注意して置く)

元來此ロメオ、ジュリエットの劇の最も古く傳はつて居る材料は希臘神話の「ピ・ラムスとチスベのはなし」で、男子のピ・ラムスとは「御・ラム」即ち牡羊で大判事に當り、女性チスベとは「豊石部」を意味しジュリエットの「石」と同じ意味である。希臘神話ではパピロンの女王セミラミス時代と謂ふてあるが、之れは西亞細亞のパピロンではなく、東遷した緬甸のパピロンの事である。又此セミラミス女王とは日本の齊明女帝の事である。日本の歴史年表は無論取るに足らぬ假作に過ぎぬ。

妹山——ヒマラヤ東部

又た妹脊山の眞正の地理を研究するに、決して現日本ではなく、西藏と緬甸と支那との國境の事で、緬甸側のヒマラヤ山を昔の別名はイモヂ(Emodi)山と謂ひ、妹路山を意味し、妹山の事である。緬甸とは Herma 即ち Herma の神の名を負ふた國名で、此神は太宰の神即ち太宰家とは是の事である。少貳國人とは緬甸北部のキンドウインの地名は「小兒一つ」「親族一つ」を意味し少貳は小兒の事、「一つ」は「國」の意味である。又た此地と西藏との境に Daphanun 山がある。別の羅典希臘譯をすると Fina-doris 即ち雛鳥山である。然らばイモヂ山系統の緬甸は妹山であることは明瞭となつた。然し妹山の方は今は太宰少貳國人の後室貞香の家長となつて居ることも考へねばならぬ。

背山——オットロコロス山

脊山とは西藏と支那との境にある、舊名オットロコロス(Otkoro-Coro)山で、之れが「大判事・清澄」を意味する希臘語で、現名雪山々脈は其れである。支那の四川省は大判事清澄の羅典譯シ、エン(Shen)に出た省名と思はれる。此山の南の地方を舊名 Arimachino と謂ふが、其意味は希臘語で「勘氣受けた清船」即ち大判事清澄の子息の名に當つて居る。西藏の此地の現代の名を Kham と謂ひ、希臘語陸を意味し、即ち久我之介の名となつて居る。又之れを脊山と謂ふは、此地の古代の總稱 Sencia の Sen(No)即ち「若い男子」たる「脊」を意味する名に取つたものである。

吾妹脊山劇とシエクスペアのロメオ・ジュリエット劇と同じなのは——豈偶然ならんやで、靜かに比較研究をすると、思ひ半に過ぎるものがあらう。茲に歴史地理の研究に於て、日本即ち大和民族に取つて決して見通がすことを許さぬのは、今説いた大判事家の土地に接続する——雲南省に於ける唐時代の地名である。

雲南省の「大和城」及び「大理府」

前に説いた大判事清澄の土地たるオットロコロスは、東は支那四川省に連り、南は雲南省に接続して、妹脊山劇に所謂「山跡の國」——大和の國であるが、唐の時代には此地の緬甸界に大和城の名があつた。

緬甸の雛鳥も滅んだ、西藏の久我之介も滅んだ。太宰家は後室貞香の代である——「女」である。「をんな」は「うんなん」即ち雲南の地名となつて居る。「をみな」即ち「をんな」の語原は英語 Woman 支那字の「雲南」は發音の假

字に過ぎぬ。ユンナンは訛りである。大判事家の羅典譯は四川であらうとは前に説いた。大判事の家と太宰の後室の家とは和睦した——四川と雲南とは仙善くなつたことを意味して居るらしい。そして雲南に大和城の名がある。茲に於て吾輩は妹背山劇の脚本を日本歴史地理の教科書として、此大和城は妹背山劇の所謂山跡の國、大和の國と断定し一部の大和民族東漸中の一滯留地であつて、大和民族の血液は今も尙ほ幾分此地に残つて居ることを唱へるに躊躇せぬ者である。

此地に又た大理府がある。そして大江匡房は大理卿であつたが、是れも亦此地の事である。妹背山劇の「山の段」は實に緬甸・西藏・支那の境界邊を研究するに最も善い書物であることを一言して置く。

佐野源左衛門常世とドン・キ・ホーテ

精神は正直で、立派であるが其する事の甚だ滑稽なのは謡曲鉢木の主人公佐野源左衛門常世で、之れが西班牙の小説家セルワンテスの名著「ドンキホーテ」の主人公と同じ人物である。いざ鎌倉に御大事ありとの事で、佐野源左衛門常世は横縫の断れた腹巻をして、鎧たりともかの長刀掻ひ込み、瘦せたりとも彼の馬に懸鞍置き、女鞆に轡を取らせ第一番に馳せ参じた。ドンキホーテも亦同じく、破れ具足をとぢ繕ひ、鎧槍をひつ携げ、瘦せ馬に懸鞍置き、従僕サンコー・パンザに手綱取らせて武者修業に出かけた。素より事變の詳細に至つては同じではないが、中心の人物は同じ人物を働かせたものである。

此通り人物其物は東西の兩小説全く同じであるが、尙進んで其固有名詞を調べて見ると、之れも亦同じであるには非常の興味がある。

ドンキホーテの従僕の名は Sancho Panza で、其サンコーは羅典語 Sanxio 即ち Sn、「佐野」である。パンザとは Panza 「凡てを見る」を意味し、源左衛門 (Gen-Sou) の名となるのである。

ドン・キ・ホーテのドンは勿論日本語「殿」であるがキ・ホーテ Qui Xote の Qui は羅典語「者」「門」を意味し、Xote は實は希臘語 *Xyote* 「常に若かく」即ち常世を意味する語である。

さればドン・キホーテと、従僕サンコー・パンザとの名を併せて其順序を作ると

日 本——佐野・源・左衛・門・常世

西班牙——サンコー・パン・ザ・キ・ホーテ

羅典希臘語——Sanxio-Panz-Sane-Don-Xyote

となるのである。

竹取の翁讃岐國造磨も亦此ドンキホーテと同じ人物であるのは面白い。竹取の翁は竹の中からかぐや姫を見出して後、又た節の中に黄金の這入つて居る竹を發見したとの事であるが、ドンキホーテも、彼れの滑稽の武者修業中、或土地の裁判官となつて、或者が竹の節の中に金銭を入れて隠して居つたことを發見した話があるが、又た竹取翁は讃岐の國造磨と云ふて、其讃岐とは、ドンキホーテの従僕サンコーと同語の Sanxio(Sanx) 又た佐野である。

源左衛門の地理は勿論日本では無く、緬甸の西南海岸のキッタゴンであるが考證は略して置く。此比較研究にも——豈偶然ならんやの感は當然起るべきである。

源平須磨戦争と『イリアッド』のヘクトールとパトロクロス

希臘に有名なホメロスの『イリアッド』の詩は、日本の源平須磨戦争と同じもので、例令少しばかりの相違は有つても大體は同じである。平家物語は葉室・時長卿の作とも云ひ、イリアッドはホメロスの作と云ひ傳へられ。ハムロとホメロ(ス)とは同じことが直観されるが、其の源平須磨戦争の岡部六彌太と薩摩守忠度との決闘は、ヘクトールとパトロクロスとの決闘と全然同じもので、イリアッド第十六章の其部分と、平家物語や、源平盛衰記でなく——文耕堂淨瑠璃集『須磨源平』第四段とを比較すると一分一點の相違がないことを發見する。岡部六彌太と薩摩守忠度との事は、日本文學や其芝居を知つて居る者は皆知つて居る事であるから、此に述べることを略しイリアッドの其部分も、全く之れと同じであるから之れも略して置くが、六彌太の名の語原は羅典語 *Longchata* で之れを希臘譯すると、*Hektor*(*Hektor*)である。又た薩摩守忠度は歌の名人で、千載集に「故郷の花」と題して「さざ波や去賀の都は荒れにしを昔ながらの山櫻かな」の歌が選まれてある。「故郷の花」の希臘譯は *Patri-dos* で説明も考證も何にも入らぬ。此うして薩摩の守忠度の名は、「故郷の花」の名を以つてパトロクロスとして希臘文學に傳はつて居る。又た忠度の死ぬる時に簾の中の短冊には「旅宿の花」の歌があつたが之れも亦パトロクロスと譯されるのである。東西の文學及び歴史の一致も此處まで來ると興味が非常では無からうか。

地理の考證は略するが、イリアッドの地は決して從來の人々の信ずる如く、小亞細亞ではなく。又た須磨も素より日本の須磨では無く、緬甸西海岸のキッタゴンで、日本の地理も新トロイも何れも寫しに過ぎぬ。忠度の墓も其處にある筈。何故ならば此忠度は「世上に眼高波や」の贊辭を有つ人で、キッタゴンの別名をイスラマベッド

と謂ひ「高浪」を意味し、忠度の別名と謂ふことが知られるからである。若し日本人で緬甸へ旅行する人が有つたら、願くばキッタゴンに忠度の昔を弔ひ玉へ。必ず此地の或『木の下蔭の苔の下に』忠度の靈は休んで居る。無官大夫敦盛と熊谷次郎直實との事は、イリアッド後日譚として『アイチオピス(敦盛を意味す)』の詩の女將軍ベンテシレヤとアキレウスとの決闘として傳はつて居る。花の敦盛は希臘には美人將軍として女性となつて居ても、研究者は異存はあるまい。

此他に此様に一致して居る事件を擧げるならば實に無数であつて兎ても偶然に其通りの無数の一致が出來るとは思はれぬ。素より小説などは人情二ならずとの遁辭を以つて、其一致を説明することが出來るかも知れぬが、人名地名等の固有名詞が一致するに至つては——豈偶然ならんやを斷言せしめる。

吾輩は去年『ハムレットの東洋的材料』と題する一書を著して西洋第一と稱せられるハムレットの材料を、始めから終まで分解し盡して、其等は残らず印度時代の日本及び支那のものであることを證明し、苟くもハムレット學者たらん者は、西洋人と雖、日本語、日本文學、支那文學等を知らねばならぬことも附言して置いたが、残らず研究をすればする程東西の一致は——豈偶然ならんやの感を強くする。若し偶然で無いとすると、日本は勿論世界の歴史にも文學史にも、其研究法に一大革命が來らねばならぬ。茲に於て日本人も大に自覺して自信力を奮ひ起こして、此種の研究は日本を世界の中心にするの抱負が無ければならぬ。今の日本の學界は學術上の鎖國攘夷的であり、學者の眼界は小人島のそれである。コンナ事では何が出來るものか。

研究餘録

『臺灣生蕃人物語』

入江 曉風 氏 著

○貴重な史料——過般『臺灣生蕃物語』を著者入江曉風氏の友人小川直馬氏から寄贈された。曉風氏は多年臺灣警察に職を奉じ夙に蕃地に出入して、生蕃通を以つて識者間に有名な人である。本書は氏が不斷の研究を積んで編成したもので、生蕃研究参考には、立派なお、ソリチーの書物である。

本書を通讀すると、甚だよく材料が集まつて居る、又甚だ細密に傳へてあるなど、よくも是れ丈け出来たことよと感ぜざるを得ない。文章も面白い。又此書の内容研究に由つて其神話に我が日本民族のと同じものがあり、又布臘神話と同じものがあるなどを知るに於ては、此神話を持ち傳へて居る生蕃は、太古我々の民族に縁があつたものたることが知られ、此書は太古日本民族、希臘民族、生蕃族との間に民族研究の橋を架けたものである。其内二三特に注意すべきものを擧げると

に別つを意味する。赤道などの意味はあるが、又たインカと同語イカ(鳥賊、墨、コイヤ)である。

○あだいら真弓(アンデス山)——所が萬葉集第十四卷に「陸のあだいら真弓はじき置きて、せらしめ來なば、弦着げめやも」と云う歌があつて、彼等バクバクワーカーの人等が弓を二つに折つて別れたとの傳説を説明する土地のやうである。

彼等はコイヤの島へ行くと云ひ、コイヤは秘露であることは明白である。そして此南米の西岸に北から南に互る山にコルデラス・デ・ロス・アンデスと云ふ大山脈がある。其を譯すると『失はれたる若者の弓弦着け』を意味し、アンデスはアダタラ(アンドラ)で、若者を意味し、確かに萬葉集の歌を當てるべき地であり又たバクバク・ワーカー即ち彼等の本國を逃ひ出た失はれたる若者の弓の弦着の土地たることを察せられ、此書物が生蕃人と、日本民族と秘露の國とを結び付ける立派な媒介となるのである。(Cordillera de los Andes = cordillera de los Andes 若者)

○無病長壽の奉獻者——第五章に、チドケサンなるものに關して無病長壽の話がある。これは希臘神話のイナイ傳にチドウ姫とある女性で、「無病長壽を與へる」と云う女性である。チドグとはチドウ・アゲの略され

○コイヤ(南米秘露)——第四章の「大移住、弓を折りて東へ」の話の大意は——バクバクワーカーには人間が殖えて來たから其人民の半部は風説に聞くコイヤへ移住することになつた。コイヤと云ふ島は今の何處にあるか誰人も知らないが、古い東海の涯に美しき孤島があるとのことであつた。彼等が同民族から別れて行く時に、又た子孫の代に何時か廻り逢はぬとも限らぬ。其時の表章に一張の弓を二つに折り、一本の矢を二つに別けて持つて行くことにして、其コイヤの島へ行たとのことである。

此傳説は確かに據り所あるもので、其バクバク・ワーカーなる國は果して何處であるか、不明瞭であるが、今の臺灣では無いやうである。亞拉比亞夜話中にワクワクの國なるものがある、蓋これは「和國」の訛りであらう。西洋人の註にはジャパンとしてある。又其「ワーカー」は日本語「若者」で若者を意味しバクバク・ワーカーは「和國の若者」のことと考へられる。

彼等の行た東海の涯コイヤの島とは今の秘露あたりのことと、ペーコンの「新アトランチス物語」にはコイヤ(Coya)は秘露と云うてある。即ち昔のインカ國である。(インカはインキ、墨、染め、日本語の紺屋に當る)後世之れがイカドルの國名となる。イカドルとは二つ

たもので、チドウを行ふを意味し、他はチドウで、是等の名は同じである。日本語で「持統」と書いてあるは其れ。

チドケサンに潮波みの話がある。これは日本の「由來の港干軒長者」の中の安壽姫に當つて居る。土地は緬甸のキツクゴンであることは種々の材料で明白になつて居る。

○丹塗の矢——第九章「天に二つの日輪、神の子の遠征」の中、ペーラムなる神の子の話が面白い——蕃社で一人の美しい娘があつた、川へ行って洗濯をして居たら、一本の赤い美しい矢が流れて來て、娘の腰に引つ懸かつたから、娘は拾ひ上げて持ち歸り、寢床の下に置いたら、其夜美しい男が來て娘と杜を並べて夢も濃やかに睡言を語り合ふと見たのは曉の夢で夢の中の男は赤い矢を持つて居た。娘は寢臺の下を見ると書簡の赤い矢は無くなつて居た。其れから其娘は妊娠し、出來た子は男兒、これがペーラムなる不死の人間であつた。

此話は何のことはない、神武天皇が、皇后を求め玉う時に、大久米命が御すゝめした勢夜陀多良姫の話と同じもので、赫塗の矢、其夜矢が男と化ること、其男に結婚のこと、其生れた娘が神武天皇の后皇富登多々

良伊須々岐姫命である。(古事記中卷神武天皇記を見よ)
 生蕃人が此傳説を有つて居る所を見ると、彼等と日本民族との關係は、太古已に無いとは言へぬ。此傳説——パーラマが月を射る話なども、尙ほ民族地理研究に非常に有益である。

此赤塗の矢の話の地理は印度河の上流であり、パーラマはブラマ即ちブラフマと同語でブラフマ・ブトラ河などの關係からヒマラヤ山脈脈脈のものであることが知られる。

●牛皮一枚の土地を——(四十)章に、紅毛の外國人が牛の皮一枚を以つて、土人の廣大な土地を侵略する話がある。其話に據ると、外國人が来て、極めて謙遜に、僅かに牛の皮一枚で覆ふだけの土地を貰ふことを土人に願ふた。土人は牛皮一枚で覆ふ位の土地なら遣つても善いと思つて其を許すと、紅毛人は一枚の牛皮を細く刻んで、長い刻み數十百丈の紐を造り、其れで取り巻く丈の思ひ存分の廣い土地を取り、其處に、彼等の大建築を起し、植民地を作つたことである。

此話しは前に云つた希臘神話の「イナイ傳」の中のチドウ姫の話と同じで、此女性も牛の皮一枚で長い長

い紐を作り、其れで圍み得る丈の土地を得たので、話は少しも違はぬ。拙著「希臘羅馬神話」(第二十三章參照)

此うして出來た植民地を、生蕃人の傳説には「プロレンヂヤ城」と云うてあることは最も注意すべきことで、其歐羅巴方面に傳つて居る名はフロレンヂヤであり、支那に傳はつて居る名は花陰縣であり、で日本では薩摩守忠教の歌の「行き暮れて木の下蔭を宿とせば花や今宵の主人なるらん」の矢張り花の蔭の思想で傳はつて居る。又た花園とも、人の名では「お園」とも謂うてある。土地は緬甸の西海岸のキッタゴンである。

●薪の火の命——我々は又本書の十六章に、希臘神話の「カリドン」の「狩」を其儘に見るのは面白い。生蕃人は古代希臘の同族であるやうだ。彼等の投げ槍は古代希臘の其れと同じである。彼等の裸體も、殆ど同じである。其れ等も思つて兩者傳説の比較を行つと、容易に其一致が承認される。此章の「石楠花」の墓の話は、他國から來た有爲の美男子(實は鹿の化けたもの)が、一蕃舎の頭目の娘ウルテの入婿となつたこと。狩があつたこと。留守中竈の火を消えぬやう、大切に注意して居たが、其火は何の理由もなくして消えたこと、其ウルテの罎が其れと同時に死んだこと等が言うてあるが、

希臘神話のカリドンの狩と同じもので、大狩が催されたこと、家で竈の火の消たこと、其家の子か何となく死んだこと、其狩に他國から來たアトランタなる女が最も功が有つたことなど、殆ど同じである。生蕃傳説には娘の名はウルテとあるが、希臘神話には息子の母の名はアルテヤとありウトアとの相違と、母と娘との相違はあるが、要するに同じものであるとは一見したら直ぐ判るとである。(希臘羅馬神話第二十七章參照)

此死んだ婿が生前最も好いた石楠花であつた。今南投の奥の雄鹿鳴く山の石楠花の墓は亡夫を慕ふウルテの墓である一とのこと。石楠花とは發音の假字、羅典語日語源的に研究すると、

Grainage は羅典語 Grainage で、シヤクは又たスキヤ、シカの發音と意味となり、ナゲは投げ長げ、敷げきとなり、石楠花は「敷」を意味するのである。(シカスキヤ。は又た好き戀びを意味する)
 此書には尙ほ他に面白い、有益な究研材料がある。我等は臺灣の生蕃人が、是等 神話を傳へて居たことを愉快に感じ、又た入江曉風氏が、其れを集めて民族研究の有力なる資料として、我學界に與へられたことの勞を感謝するものである。(發行者、臺灣基隆哨船頭入江文太郎氏。定價一圓十錢)

□ 垣本氏の發見

——「印度・大分」古地圖——
 ——プラトーンの「メガラ」地圖——

大分の人垣本言雄氏は本會々員、又熱心なる新研究者で、我等實に敬服する所である。過日一書を寄せられた其中に

『前略、新研究の偉大を讃歎して居ります。先生、大々的に驚いたことがあります。其れは「大分市史」の第八十六頁の挿圖の大分古地圖は、大體大分地方に似て居るが、全く相違して居ります。』

- 下部に東と書き入れてあるは實は西、
- 大川筋とあるは印度の恒河。
- 上部の河はメグナ河。
- 最も上部の京泊とあるはメグナ河口。
- 川口にある沖の明神のある島は大分川中流の現在の大州に當るやうだが、地形が全く違つて居り、又た其處に神社などが在つた傳説も形跡もない。思つてベンガル灣の中の何處かの島でせう。
- 市史著者の説明は全部ウソ。
- 大分市の町は昔は大分川實はメグナ河に沿うて居

たとは面白いと考へます。
いよ／＼大友氏史に大革命が起らねばなりません。
以下略

此手紙を受けて、私は印度地圖と、其大分古地圖とを比較して研究した。實に驚いた。喜んだ。垣本氏の發見は正確に當つて居る。そして其地圖を印度として大分史を讀むと、萬事大變的に圓滿に満足の説明が得られる。

私はプラトーンの哲學は印度から西へ傳へられたものとして居るが、其「ファイドコス」篇に空蟬神話があつて、日本の「源氏」の空蟬と同じもの、同じ地理であり、其中にメガラ——大分と譯す——のことがあつて其プラトーン地理が、今度垣本氏發見の大分古地圖で見事認めるので、ファイドコス記事が、全々此地圖に書いてある。

私は實に、「印度大分」「印度メガラ」の地圖が日本に傳はつて居たことを愉快に思ふ（此種の地圖は尚ほ澤山有ること、信ずる。例せば、前に度々言つた希臘難波圖、波斯難波圖、印度難波圖の如き。）

他日此「印度大分」圖を紹介する機もあらうが、たゞ此事を一言報告して置く。垣本氏には、尙ほ是れ以外種々新研究の發見がある。其れ等も追々報告し度いと

思ふ。

此に序を以て附記して置くが、大分は澤山あつて、景行天皇紀の大分は希臘のメガラ（大分の譯）であるが鶴登草葺不合天皇の古き時代の都たる大分は阿弗利加北岸のカルタゴで、別名をメガラと謂ひ。又た大分を新城と云ひ、カルタゴの別名をニオ・ポリス（新城）と云ひ荷揚城とはカルタゴの日本譯。府内城とはホイナイ即ちホエニシヤを意味する。そして此地名が東に移つて印度の、今云うた大分、次に緬甸のキツタゴン大分となるのである。是等の説明は、他日其機があらうと信ずる。

□桃太郎——何が悪い

東京市役人等餘りに神經的

今度東京殿下の御歸還を奉迎する爲めに、東京市では花電車に桃太郎の鬼ヶ島歸りの飾り物の意匠があつて、誠に結構なものであり、膨脹的、活躍的日本の教訓的のものであつたが、説を爲す者があつて、是れは外征的、侵略主義だからイケナイとかで、俄に其意匠を變更することになつたとのこと。我等は其餘りに神經的なのに驚いた。

元來桃太郎の鬼ヶ島遠征とは何か。侵略掠奪ではな

く、一種の發見的探検である。桃太郎や鬼ヶ島ことは前巻に述べて置いた通り、ニウ・ジランドの遠征で、全く新陸地の探検に過ぎぬことは昔話でも判つて居る。彼れ小兒英雄決して他國を掠奪などして居らず島の土人等が、たゞ其勇武に恐縮して寶物を献上したばかり、——これは彼島の産物を日本に献上して交通開始を希望したに過ぎぬのである。

雉子や、犬や、猿を供に連れて何の侵略が出来るか。たゞこれ古代の海上發見と探検とを小供のおとぎ話に直したに過ぎぬ。他國人は何とも云はぬものを自ら侵略主義など、稱して、世界の偽善國の御機嫌とりの爲めに、桃太郎を徹廢するなど、眞正の歴史の知識の無いに加へて、極度の神經質なのは、實に憫然で我々は驚くの外はない。若し常に彼等の如きことを言うて居ると、コロンプスも、マゼランも、クツクも、皆盡く侵略的で人類の敵と言はねばならぬことになる。

あゝ神武天皇——「六合を兼ねて都を開き、八紘を掩いて宇と爲さん」との大決心を有し玉う神武天皇の子孫たる日本人は、此くまでも墮落して仕舞つたのか。あゝ東京市役人等は餘りに無見識、又た阿諛的根性で唾棄に値する。

□加藤朝鳥氏瓜哇歸信

一ヶ年程瓜哇日々新聞社に居られた、加藤朝鳥氏は此度歸朝せられたが、妻君（みどり女史）の病氣の爲め妻君の郷里に歸つて居られる氏よりの來信——

「その後はいかゞ瓜哇談を痛快にやつて一日大兄と遊び等いたしく思ひながら、まだ機を得ざるうちに、昨日急にこちらにまいりました。こちらにて大兄のタメルラン説をよみ、僕更に瓜哇の材料で面白い聯想を有するものがあります。瓜哇に於てもファンコールと云ふ人の、日本研究の一書を見て、なかに大兄の言を引用せるもの多きを發見し、うれしく思つた事があります。同著は主としてジャパニースとジャパニースとの、同人種なることを記載し、盛にその類似點を列舉して居ました。いづれくはしくは後ほどに亂筆御ゆるし下さい。」（信濃國上伊那、八月廿六日）

谷田氏榮進——本會相談役たる谷田繁太郎氏は過般工兵監に任せられ、帝國の工兵々事、武器等に關する最高官に進まれたが、此度又た破竹の勢を以つて陸軍中將に進級せられた。日本の民族協會は謹んで祝意を申し上げます。

畫家入部長府氏の巴里に於ける名聲——奈良に於ける本會會員大村長府氏は、かねて直觀寫現の畫法を創められ、又た熱心に其主義を唱へ居られたが、昨年氏の油畫は巴里のローヤル・アカデミーへ入選し、今年巴里サロンに入選し、此頃サロン幹事から『主義尊重、一同大に裨益せり、今後は出品引續き有り度』き旨通知を受け、尙ほ巴里の『現代美術雜誌社』から大郵氏の肖像、履歷等を載せ度いから送るやうにと通知して来たとのこと。大に氏の爲めに祝します。

此篇は——前卷に、豫告して、『研究叢錄』と題し、夏期講習の氣分での考へで目次を擧げて置きました。が、一ヶ月發行に遅延し、又た紙數が餘りに多くなり、ますから、豫告通り載せることが出来ませんでした。ことを、御詫び致します。

御芳志を感謝いたします

左の諸氏より研究費、印刷費中へ御寄附を辱うしました謹んで感謝いたします。

- 一金五十圓 市外上戸塚 永井 米藏氏
- 一金五十圓 東京銀座 松永敏太郎氏
- 一金五十圓 麻布谷町 小泉 準一氏
- 一金十圓 市外上戸塚 上甲保一郎氏
- 一金十圓 千葉縣 長澤 子妙氏
- 一金五圓 小石川 松本 道別氏
- 一金五圓 市外下濃谷 角地藤太郎氏
- 一金五圓 東京本郷 録倉 稻澤 謙一氏

新入會員 (アイウエ順)

- 京橋區 小澤 信昭氏
- 京橋區 鹿子木 魁氏
- 神田區 小林喜代詞氏
- 福井縣坂井郡春江村 小林平左衛門氏
- 牛込區 近藤 定喜氏
- 市外果鴨町 佐藤 太郎氏
- 市外代々木 谷 洗馬氏
- 小石川區 三浦 義男氏
- 加賀金澤市 山本善太郎氏

●日本民族研究叢書既刊

及び續刊目次の一部

- 仁德帝の埃及難波(既刊)(品切れ)
- 高天原(既刊)(品切れ)
- 神武帝の久米歌は編国歌(既刊)
- 日本民族東漸史(既刊)(品切れ)
- 當世の國——何處?(既刊)(品切れ)
- トマス・ユトビヤ國(既刊)(品切れ)
- 日本民族祖先の雄圖(上下既刊)(合本あり)
- 爲朝とタメルラン(上中下)(既刊)
- 日本が世界に與へし『世界平和の理想』
- 『繼體天皇紀』と『マルコ・ポーロ紀行』
- 神功皇后傳
- 神夏磯姫とアビシニヤ
- 屈原『楚辭』の新研究(太古世界一周の書)
- 『御曹子島渡り』(印度、阿弗利加關係)
- 國生み神生み地理
- 聖德太子の『夢殿』研究(西伯利亞、沿海州)
- 『謡曲』の世界的研究
- 太古バルカン、希臘に於ける日本民族
- 百人一首は印度代表地理歌
- 源氏物語は印度の地理小説
- アリストレスと山鹿素行
- 日本、支那、西洋の文字及び言語の同系
- 太古亞米利加發見者は日本民族
- 其他研究發表無限——續々刊行す

次卷豫告

世界の三大宴會

和田の酒盛——項羽、沛公鴻門の——
プラトーンの宴會

定價(會費)壹圓 (但會員外は一圓二十錢、内

國送料不要、外國は「料を申受けます」)

大正十年十月 日發行

- 東京市外。戸塚町諏訪一七九番地 著作者 木村 鷹 郎
- 東京市神田三崎二丁目三番地 發行者 尾崎 榮 郎
- 東京市神田區三崎町二丁目三番地 印刷人 井波 修 次郎
- 東京市神田區三崎町二丁目三番地 印刷所 同 工 舎 郎

發行所

東京市外。戸塚町諏訪一七九番地
日本民族協會
振替口座東京六九七〇番

The Monthly Pamphlet of Japanology—

—Grounded upon the new investigation of the Japanese, as a race which originated in Armenia Asia Minor; and expanded and migrated westward, and eastward, and at last settled in the present island Japan.

By **T. KIMURA**

AUTHOR OF—The Antique History of Japan—or the Japanese as a Greco-Latino-Egyptian Race in two volumes; 'The History of Oriental Ethics'; 'Shakespeare's Hamlet a mere Compilation of the Oriental materials'; 'The Greek and Roman Myths'; 'The Christianity investigated Japanically'; etc.

TRANSLATOR OF—The Dialogues of Plato in five volumes; Xenophon's 'Memorabilia'; Aristoteles' 'Politics'; Byron's 'Corsair', 'Cain', 'Mazeppa', 'Manfred'; 'Zend-Avesta' etc.

CONTENTS

1. "The Ideal of the Universal Peace," which the Antique Japanese gave to the World 1
~~~~~
2. A tale of the Cicada in the "Genji-monogatari" (a Japanese literature), and the Cicada in the "Phaidros" of Plato. ....11
3. The relations between Ithako in Japanese literature, Venezia in Italy, and Dhamra in Orissa, India.....19
4. The Comparisons of many tales, of the Japanese and of the Europeans: and the identities found between them.....26  
~~~~~

Miscellaneous:—

- 'The Myths of the Natives of Daiwan,' by Mr. Irie—in which many identities to the Japanese and Greek myths are found.42
- The Map of the antique "Ôita (Megara) in India," discovered by Mr. K. Kakimoto45
- And others46
~~~~~

**THE NIPPON MINZOKU-KYÔKWAI**

179 Suwa, Totuka-mati, Tôkyô, Japan.

Price 1 Yen.

終